



武蔵野

埼玉大学図書館

2014年2月28日 15号



日本の今、世界の今 目次

○現在・過去・未来.....坂西友秀(1)	路子.....(22)
○心でつなぐ平和の想い.....押井那歩(7)	○「肥後の猛婦」の独り言.....城川由美(23)
○Saitama University Students Presented Short Papers in English at Gakushuin University to an International English AudienceStacey Vye (13)	○「第3回図書館会議」の開催.....(25)
○いまどきの定時制高校...戸賀沢亮子(19)	○北欧スウェーデンの暮らし(けやきの窓)北田 礼(26)
○定時制高校の教師人生.....高野大樹(21)	○図書館増築と改修工事のお知らせとお 願い.....肥土広康(29)
○2013年度図書館と県民のつどい-河川 の国~荒川を中心に~..柴原秀美・山岸	○2013年度埼玉大学図書館の活動.....横塚光春(30)
	○既刊一武蔵野一覧.....(32)

日本の今、世界の今

現在・過去・未来

はじめに 昨年、親日的といわれる国を2つ訪れました。フィンランドと台湾（国際連合では中華人民共和国）です。なぜ、両国が親日的なのか、その理由ははっきりしません。フィンランドのヘルシンキは、シベリア上空を10時間ほど飛行して到着する距離にあります。携帯電話のノキアに代表される電子機器の産業が発達していることで有名ですし、OECD（経済協力開発機構）が推進する国際的な学習到達度に関する調査PISA（Programme for International Student Assessment）で、世界のトップレベルの学力を維持してい

ることで注目を集めています。

フィンランドと日本 飛行機の中で隣の席の女性が、気さくに話しかけてきました。彼女は、フランス経由で日本に渡り、東京で海洋の安全に関する会議に参加してきたといえます。「街がきれいですね」と驚いていました。ヘルシンキ郊外に住み、市内に勤務しているとのこと。仕事のことから子どものこと、レジャーのことなど話しは広がりました。帰国後、真っ白な雪原で「Cross-country Skiing」を楽しむ彼女の写真がメールで送られてきました。

フィンランドの小学校に行くと、日本の漫画が教材に使われていました。高校では日本語を選択授業で教えるところもあります。書店には、ワンピースなど日本の漫画コーナーがあるほどです。また、

柔道も人気があります。子ども向けに道場を開く、親日家の男性の家に招待していただきました。リビングルームには、日本で撮った講道館などの写真が飾られていました。



書店のMANGAコーナー



高校の日本語授業



柔道の稽古を見せてくれる子

大使館の資料で、フィンランドの特徴を見てみましょう。フィンランド語とスウェーデン語がフィンランドの公用語です。国民の90%がフィンランド語を話し、5%がスウェーデン語、1%がロシア語を話します。フィンランドが、スウェーデンやロシアと深い関係にあることを表しています。フィンランドは、両国の支配下にあった時期があるのです。早くも1115年には、キリスト教の布教とともにフィンランドはスウェーデン王国の一部とされました。18世紀初頭には、スウェーデンとロシアの間で戦争が起こり、フィンランド東部の一部もロシアに割譲されました。19初めには、再びスウェーデンとロシアの間でフィンランド戦争が起きました。フィンランドはロシアに割譲され、ロシア皇帝はフィンランドを立憲君主制の大公国にしました（スウェーデンの民法や刑法、社会制度の大部分が維持されました）。

1917年、ロシア革命の年にフィンランドは独立を宣言しました。しかし、1939～1944年にはロシアが再びフィンランドに侵攻し戦争状態が続きました。その結果、フィンランドの一部はソ連に割譲さ

れますが、フィンランドはソ連による占領を阻止し、独立と主権を守りぬきました。この時期、ロシアは極東で、日本と戦争状態（日露戦争, 1904～1905年）にありました。不滅のバルチック艦隊が敗れ、ロシアは大きな打撃を受けました。フィンランドを初めロシアから軍事的な圧迫を受けていた国々にとっては歓迎すべきことでした。フィンランドが親日的になった背景には日露戦争が影響している、との話を耳にしましたが、本当のところはどうなのでしょう。

台湾と日本 台湾は、日本と関わりが深いところでは、琉球王国の時代に、宮古島の島民が、人頭税を首里に納めに行った帰りに遭難し、台湾に漂着しました。台湾には原住民族の人々が暮らしていました。宮古島の島民は、原住民族の集落にひとまず落ち着きますが、その後ほとんどが殺害されてしまいました。牡丹事件です。原住民族の一つアミ族の子孫である青年（巴里勞文化事業有限公司・沈仲文さん）は、「原住民族には国家の観念はなく、事件にはそれなりの事情があった」と語っていました。

その後、日本は清と交渉を進めますが、

最後は台湾出兵を強行しました。日清戦争の勝利で、日本は台湾を領有し、台湾総督府（現在も建物は使われています）を置いて住民を支配しました。軍の支配は、台湾の隅々にまで及び、急峻な山間（やまあい）に住む原住民族も例外ではありませんでした。霧社事件は、日本の侵略と圧政に対する原住民族のやむにやま

れぬ激しい抵抗でした。多くの日本人が殺されましたが、日本軍が殺害した原住民族はそれを遙かに上回ります（鄧相揚, 2000）。霧社郡庁の課長（南役懸仁愛郷公所建設課課長・邱建堂さん）は、「親族が日本軍に殺されました。住民の不満と怒りは頂点に達していました。」と話してくれました。



日本軍と戦う原住民族像



霧社事件の住民戦士の埋葬地



山の居住地を説明する邱さん

日本の敗戦により、台湾は日本の統治から解放されました。しかし、台湾の地方自治の実現、民主化は険しいものでした。1947年には、台湾統治者と民衆が対立し、国民政府主席蒋介石は、鎮圧のために台湾に派兵をしました。二二八事件です。「台湾の主だった知識人とリーダーは、この事件で徹底的に粛清され、亡くなりました」。「私はここには（台北二二八記念館・台北市政府文化局, 2011）にはほとんどきません。胸が押しつぶされ、涙が止まらないからです」、案内をしてくれた黄さんは静かに話しました。

日本統治時代、日本の教育制度に倣って台湾教育令が施行され、学校が設置されました。今でも年配の人には、日本語を理解する人が珍しくありません。

日本統治時代に学校の「黒板」が大量に必要になりました。その頃植えられた「黒板の木」が、いたるところに街路樹として立っています。

女学校や高等学校は、現在校舎は改修

されていますが、今も使用されています。



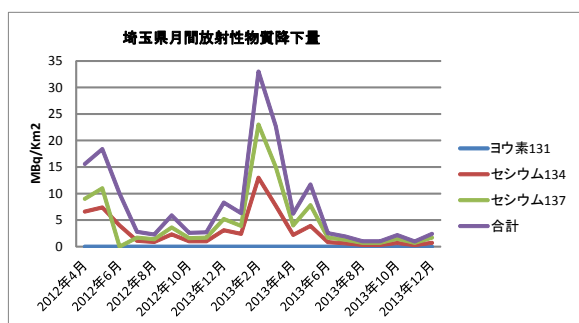
台北二二八記念館（旧日本軍放送局）

道路や水道などのライフラインも日本時代に整備されたといいます。生活環境の整備、工場や産業の育成、植民地教育の普及等、台湾の今につながる社会基盤を部分的に作り出したと考えられているようです。厳しい戦争と過酷な日本統治があったにもかかわらず、台湾の人々が「親日的」といわれる理由は謎のままです。

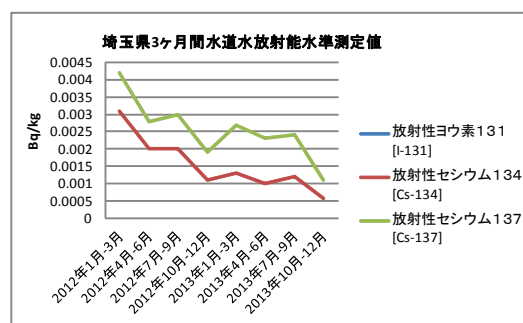
温故知新 フィンランドも台湾も観光で訪れる人が多いのではないのでしょうか。二つの国・地域に共通することは、他国から侵略された歴史を持つことです。特に、台湾は、日本の統治下にあった特別な関係にあるところです。台湾・桃園空港に向かう機内で、お正月のマニラに帰省するという女性が話しかけてきました。日本の男性と結婚し、弟妹も日本に暮らしているといいます。「フィリピンにも、尖閣諸島と同じように島の領有権に関わる問題があり、とても関心がある」と話していました。彼女のことばは、紛争や戦争は、過去のものではないことを強く思い起こさせるものでした。

一方、ロシアでは、冬のスポーツの祭典「ソチ冬季五輪」が開幕しました。華々しい舞台上で競技が繰り広げられる一方で、「テロ」が五輪の安全に脅威を与え

ています。ブラジル・サンパウロでは、サッカー・コンフェデレーションズカップや2014年のワールドカップ準備に公費を無駄遣いしているなどと抗議し、大規模のデモが行われてきました。2020年には、東京オリンピックが開催されます。誘致にあたって、最大の問題は、福島原発から出る放射能汚染水の処理でした。直接的な暴力や戦争が無いだけで、平和であるというわけではありません。日常の暮らし・生活、さらには生命・生存を危険に曝す事態もまた、私たちには大きな脅威となり、平和を危うくするものです。社会の仕組みやあり方によって人々の生活苦、経済的格差や生存の危機は生み出され（構造的暴力と呼んでいます）、「平和」は脅かされるのです。放射能汚染もその一つです(坂西, 2014. 3, 刊行予定)。「平和への脅威」は、日本の日常にも



月間放射性物質の降下量 (埼玉県, 2014)



3ヶ月間水道水放射能水準 (埼玉県, 2014)

潜んでいます。私が今最も恐れるものの一つは、「福島原発」の放射性物質の放出と、それによる疾病の発生・罹患者の拡大と深刻化です。放射能汚染は常態化し、現在も進行しています。上掲の図は、今も放射能が空气中に放出され、水道水にも含まれていることを示しています。環境内に拡散し蓄積された放射性物質は、除去も処理も保管もできず、放置されたままです。「東京電力は..... 観測用井戸で、昨年7月に採取した水から、

過去最高値の1リットル当たり500万ベクレルのストロンチウム90を検出したと発表した。東電によると、....公表を見送っていた」。事故以来ずっと繰り返される情報の未公表です。これはまさに生命の安全と平和を揺るがす問題です。

ふと、宮沢賢治の「注文の多い料理店」が頭に浮かびました。「ふとった方やお若い方は、大歓迎いたします。」「お客さま方、ここで髪をきちんとして、それからはきものの泥を落としてください」

.....「壺の中のクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。.....「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうか体中に壺の中の塩をたくさん塗りこんでください。.....「たくさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文しているんだ。」「西洋料理店というのは、.....来た人に食べさせるのではなく、来た人を西洋料理にして食べてやる家とこういうことなんだ。」(宮沢, 1964, pp. 46-53)。「おいしく食べるつもりが、食べられる」、私たちが気がついたら「山猫軒」のお客になっていた、などということにならないようにしたいものです。

「武蔵野15号」の紹介 今号は、「日本の今、世界の今」と題して、いろいろな視点・角度から話題を提供していただきました。日本、そして世界がめまぐるしく変転する今、地球を鳥瞰するほど広い視野をもち、過去を振り返り、未来を展望する機会になればと願っています。

押井さんには「東京大空襲」の語りについて寄稿していただきました。二瓶(旧姓和田) 治代さんへの聞き取りと記録から、「東京大空襲」の経験を事実に基づき脚本化し、押井さん自らが「語り」を行いました(朝日新聞が2013. 8. 17付で記事を掲載しています)。「二瓶さんがご自分の体験をこうして語られるまでには、50数年というとても長い時間がかかっています」。このことばは、「誰の心にも、その奥に故郷がある。.....そんな俺の思いでを大きなわだかまりが半世紀も邪魔をしていた」(大石, 2007)と記したビキニ水爆事件の被爆者大石又七さんを思い起こさせます。想像を超えた過酷な体験が、心の解放を阻むのです。

日本が降伏し、戦争が終わる前夜1945年8月14日、埼玉県では熊谷の大空襲がありました。アニメビデオは、空襲を逃

れて疎開してきた幼い少女が、焼き尽くされる町を逃げ惑い、用水路の中で息絶える、短く悲惨な生涯を描いています。焼け野原のがれきりの中の不発弾で遊ぶ子どもたち。彼らは突然の爆発で跡形もなく吹き飛ばされます。戦争の悲惨さ、理不尽さを物語っています(木下・木下, 1993)。アジア諸国との関係が強まる今日、日本とアジアの国々との関係を視野に入れ、改めて戦争と平和の意味を広く、深く私たち一人一人が考えてみる時期に来ているのではないのでしょうか。

Stacey さん(英語教育開発センター准教授)には、英語教育における、学生の自発的な学習への取り組みと学習過程の「振り返り」が持つ語学習熟への積極的な効果を紹介していただきました。学習院大学で開催された、国際学会で、Stacey 先生の指導の下、学生が自発的学習の持つ意味を発表し、学習が深化していく過程を明らかにしています。事前に測定した学生の知識の習得状態と、事後の状態を比較検討することにより、授業の効果を検証するなど、心理学的にも大変興味深い論考になっています。

戸賀沢さん(養護教諭)・高野さん(保健体育教員)には、定時制高校と生徒の現在を、それぞれの視点から書いていただきました。かつては、勤労青少年が、働きながら学ぶ場が定時制高校でした。それは遙か昔のことです。苦学生のイメージは、今の定時制高校には当てはまりません。高校の形態も変わり、単位制の学校もできています。外国人学生を受け入れる学校も少なくありません。生徒が生活や勉学上に大きな課題を抱えるケースも多く、「取り出し指導」も行われています。経済問題に限らずさまざまな「格差」が生徒の間に生じています。多くの困難を生み、日常の「平和」を崩壊させ、彼らを苦境に追いやる現実が垣間見えて

くるかもしれません。

城川由美さん（熊本大学教育研究推進部・図書館ユニット・ユニット長）には、『『肥後の猛婦』の独り言』をお寄せいただきました。職場・仕事に関わる男性と女性の違いをユーモアとエピソードを交えて書いていただきました。共働きをする女性は、多忙です。家事・育児・子どもの教育、さらには寝に至るまで、男性に比して女性の負担ははるかに大きい、これが日本の現実でしょう。冒頭で触れましたフィンランドでは、2011年の統計では、国会議員に占める女性議員の割合は42.5%です。世界の国会の女性議員比率が昨年初めて2割を超えました。列国議会同盟（IPU、本部ジュネーブ）が3月発表した2012年調査報告でわかりました。平均値は20.3%ですが、日本は、12月の総選挙で衆院の女性議員が7.9%に減って、ランキング（二院制の場合は下院）は現在、190カ国中163位まで落ちているそうです（朝日新聞 DIGITAL, 2014）。埼玉大学でも男女共同参画、女性の登用と活躍を一層図ることを大きな目標に掲げています。城川さんの指摘は正鵠を射ています。男性のかけ声は勇ましいのですが、埼玉大学の教育研究評議会には今女性のメンバーはいません。

北田さんは、現在スウェーデンの Linköpings Universitet に交換留学生として在籍し、現地で学んでいます。彼女は教師を目指しています。share house や大学での生活、友だちとの交流やショッピングなど、自由に書いていただきました。一つだけ、図書館ニュースとして、是非 Linköpings 大学の図書館の様子や利用する学生の姿、北田さん自身が図書館を利用した感想なども報告していただくようお願いしました。学内の学習環境が、よく整っている様子が伺えます。

柴原秀美さん・山岸路子さん（図書館

・情報サービス担当）には、埼玉県図書館協会・埼玉県教育委員会等が主催する「図書館と県民の集い」（桶川市民ホール・さいたま文学館で開催）に参加したときの展示を報告していただきました。「大学図書館のお宝お見せします」の看板の下、県内の10大学・施設（跡見学園女子大学・国立女性教育会館・埼玉大学・芝浦工業大学・城西大学・女子栄養大学・聖学院大学・東洋大学・文教大学・ものづくり大学）が展示会を開きました。埼玉大学では、荒川にちなんで「河川の国～荒川を中心に～」をテーマに関連図書を陳列しました。企画・展示に表れる各大学の特色・特長が見どころでしょう。

最後に、図書館の1年間の活動記録と既刊の武蔵野の一覧を掲載致しました。武蔵野は、今回の15号をもって一まず締めくくりとさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

引用文献

- 朝日新聞 DIGITAL 2014年4月13日 女性議員比率、衆院は世界最低レベル IPU調査 (<http://www.asahi.com/politics/update/0413/TKY201304130200.html>)
- 大石又七（2007）ビキニ事件の表と裏かもがわ出版
- 木下蓮三・木下小夜子 1993 最後の空襲 くまがや STUDIO LOTUS
- 時事通信 2013年2月6日 ストロンチウム500万ベクレル＝過去最高、昨年7月地下水一福島第1 (<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140206-00000146-jij-soci>)
- 台北市政府文化局（2011）台北二二八記念館の常設展示特集
- 鄧相揚（2000）抗日霧社事件の歴史 日本機関誌出版
- 坂西友秀（2014）「グローバル化の中の偏見と差別」 伊藤武彦・杉田明宏編 『平和を創る心理学』 ナカニシヤ出版 67-81 （3月刊行予定）

フィンランド大使館・東京 2014年2月12日
フィンランドについて
([http://www. finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46038&contentlan=23&culture=ja-JP](http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46038&contentlan=23&culture=ja-JP))

宮沢賢治 注文の多い料理店 宮沢清六・
横尾青史編集 (1964) 宮沢賢治童話集
3 イーハトーブの童話集 岩崎書店

(図書館長 坂西友秀)

心でつなぐ平和の想い

～東京大空襲戦災資料センターでの「夏の親子企画」に参加して～

押井那歩
教育学部1年

私は、去年の夏、江東区にある東京大空襲戦災資料センターで、8月14日から18日にかけて催された「夏の親子企画」に参加させていただきました。この企画は、当時の戦争体験者の方のお話や、東京大空襲のことを描いた紙芝居「あおよ、かえってこい」¹の上演等をとおして、親子で「戦争」について知り、考えてもらおうという企画です。今年のテーマは「戦争と空襲孤児」。わたしは、8月の17日、18日に「戦争体験の聞き語り」と「紙芝居」をやらせていただき、「戦争」を伝える側として、来館して下さった方々と交流しました。

私が今回挑戦した聞き語りは、1945年当時8歳で東京大空襲を経験された、二瓶（旧姓和田）治代さんの体験の語りを模して、私が二瓶さんの体験を語るというものです。二瓶さんは、現在もこの東京大空襲戦災資料センターでご自身の体験を語っておられます。二瓶さんの語りを直接お聞きし、また、それを文章にさ

れているものをベースにして、私は聞き語りの脚本を制作しました。その脚本を使って、親子企画に来てくださった方々の前で語りを行いました。

実は、二瓶さんがご自分の体験をこうして語られるまでには、50数年というとても長い時間がかかっています。二瓶さんは、自分のそばで亡くなっていった数えきれない人の命を考えると、「自分がうまく話せなくて、聞いている人に伝わらなかったら、亡くなった人に申し訳ない」、「自分には関係ないと思われたら…」という思いを持たれ、ずっと一人で悩まれて、体験を誰にも語らずにおられました。センターの方から「話してくれないか」といわれた時も、最初は断られたそうです。しかし、「自分が言わなかったら、自分の周りで燃えていった人たちは誰にもわからないままになってしまう」と、二瓶さんは悩まれた末に語ることを決められたのだそうです。今の二瓶さんの語りには、戦争の事実だけでなく、二

*1 早乙女勝元 脚本・木村 正志画「あおよ、かえってこい」童心社、1985年。この紙芝居の脚本は、東京大空襲・戦災資料センターの早乙女勝元名誉館長によるものです。

瓶さんの50数年分のそれまでの想いがいっぱい詰まっています。そして、今の二瓶さんの語りは、50数年間一人心中で闘われた末の、人生の結晶のようなものだといえると思います。

そんな二瓶さんの重い語りを果たして私ができるのだろうかと不安に思いました。また同時に、戦争体験者でない私が戦争のことを伝えるのは無理なのではないかとも考えました。しかし、何回か二瓶さんの語りを聞いたり、お話を伺ったりしているうちに、二瓶さんの人柄やお話、そして想いに感動している自分がいました。そして、私のできる限りやって

みようという気持ちの方が大きくなっていききました。不安や否定の気持ちを覆うくらい、私の心は二瓶さんの語り・想いへの感動でいっぱいになっていました。そして、演じようとするのではなく、二瓶さんの当時の気持ちや現在の想いでできるだけ迫れたらという気持ちで、語りを試みました。そうしてみると、今までイメージの湧かなかった「戦争」、「空襲」について、これまでにないほど、自分のこととして考えられるように感じました。ある意味で、当時の二瓶さんの「あの日」にタイムスリップしたような感覚を味わうことが出来ました。



押井さんの語り



話し合う二瓶さんと押井さん

今回の体験を通して、私たちの世代が戦争体験の「語り」をすることは、次世代への戦争の記憶の継承の意味だけでなく、私たち自身が「戦争」について自分の中に取り込んでいくためのとても有効な手段であると感じました。そのような取り組みがあつてこそ、当時の映像や写真、証言記録等が意味を持つてくるのではないかと思います。

しかし、今回の語りの体験を通して見えてきた課題もあります。私は、現在は、二瓶さんのご自身の体験の語りを直接ご本人から聞くことが出来ます。そのように、体験者が生きておられるからこそ、直接お会いする形でそのお気持ちや雰囲気

気を具体的に知り、ご本人からいろいろとお聞きすることが出来ました。また、私のような戦争を知らない世代が聞き語りをするときも、具体的なイメージを持って当時を想像して語る事ができるので、語りを聞く人たちも実感をもって聞くことが出来ます。しかし、私たちが語りをする本当の必要性は、体験者の方々がおられなくなってからも語り続けるようになっていることではないかと思えます。事実、戦争を知らない世代だけで、今回と同じような語りができるのかと考えると疑問が残ります。また、そのことについてははっきりとした解決策は、私の中でまだきちんと見えてきてい

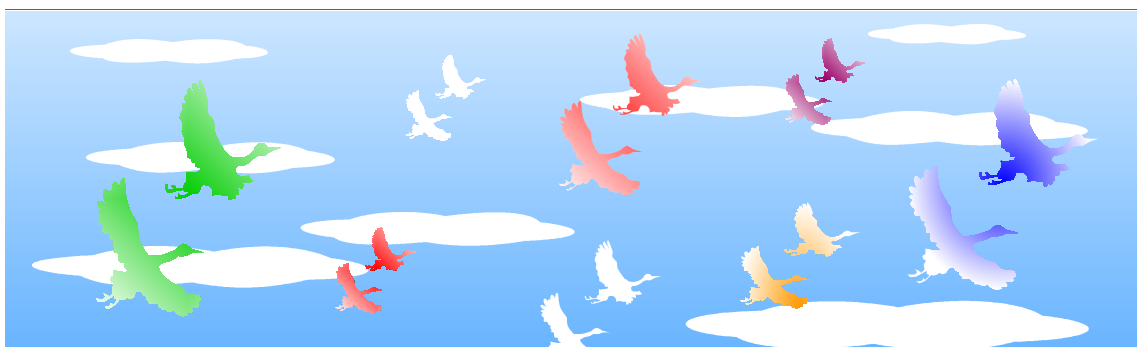
ません。それは、戦争の問題が「命」を扱うとても重い問題だからでもあると思います。しかし、今回の語りの体験や二瓶さんと関わりを持つことが出来たことは、今まで私の中で暗闇の中だった「私たちの世代が語り継いでいくこと」の問題について、確かに光を当てることが出来たと思います。

私たちは「戦争」を知らない世代として今の日本で暮らしています。平和な世の中で暮らしていることは本当に幸せですが、それがかえって、過去に起こった「戦争」という事実を「おとぎ話」、つまり単なる昔話にしてしまっているように思います。これから戦争体験の継承がますますの課題となっていくなかで、戦争の記憶を「おとぎ話」ではない形で伝えていくためには、まず私たちが当時のことを主体的に考えたうえで発信していく必要があります。

「主体的に」考えるということは、単に資料館や博物館にある資料や写真をみたり、体験者の方々のお話を伺ったりするだけでは出来ません。実際に体験者の方やその地域の方々と交流していく中で「平和」について考え、「語り」や「紙芝居」といった方法で疑似体験をしていくことによって可能になると思います。また、これらの聞き手の心としっかりコミュニケーションのとれる方法で心と心が響き合っていくことが、「主体的に」平和を考えるということだと思います。「人と人との関わり合い」、「心と心の響き合い」から生まれる平和への想い・そ

の継承こそ、本当につながっていくものではないか、人の心に残るものではないか。今回の企画を通して私はそう感じました。

戦争の記憶は多くの人々の命の記憶であるはずですが、しかし今、私たちが「戦争」を考えようとする、なぜか主役である「命」やそこから生まれる「人との関わり」「人の想い」といった事柄は隅におかれてしまい、被害の規模や戦争についての知識ばかりがピックアップされてしまうように思います。そういったことばかりにスポットライトを当ててしまうと、現実味のない、それこそ「おとぎ話」に感じてしまいます。「戦争」「平和」を考えるときに、状況把握等の単なる事実の理解で終わらずに、そこからもう一歩進んで、多くの人々の想いが響き合い、つながり合った中で、命輝く「人」が主役になる平和の学びが出来ることが、とても大切だと思います。そうすれば、私たち戦争を知らない世代の「戦争の記憶の継承」が、同時に「平和への想いの継承」にもなっていくのではないのでしょうか。戦争ということを考えるとき、それは過去を振り返るだけのことではないのだと思います。その事実を通して「今を生きる私たちがどう考えるか、どう受け継いでいくか、そして、どう行動していくか」という「未来」を考えることなのだと思いました。今回の体験はまさに、戦争の事実から私たちが「未来」を考えるということの一步であったと思います。



<二瓶治代さんの語りを語る>

「炎の夜 またあした、あそぼうね」

原作：二瓶治代
脚本・脚色*：押井那歩

<前語り部分>

これからお話しするのは、1945年3月10日未明に起こった東京大空襲を生き残った二瓶治代さんの、当時8歳だった時の体験です。この東京大空襲で、東京下町は炎の海と化しました。数えきれない無数の焼夷弾が、ヒューヒュー・ザーザーと雨のように降り注ぎ、家もひと関係なく、みんな燃えていったといいます。二瓶さんが私たちに語ってくださった「あの日」のことを、今度は私が、二瓶さんに代わって皆さんにお伝えしたいと思います。

<語り本体部分>

その時わたしは、8歳の女の子でした。わたしの家は5人家族で、今の江東区亀戸に住んでいました。

3月9日は、空襲がなかったので、友達5～6人で遊んでいました。母親の「ご飯だよ」と呼ぶ声がして、「じゃあ、またあした、あそぼうね」といって、別れて、それぞれの家に帰りました。

9日の夜。何時頃だったか、「今日はいつもと違う、起きろ！」という父の声にハネ起きました。わたしは、ものすごい速さで着替えをして、リュックを背負い、防空頭巾をかぶり、靴を履いて外に出ました。

風のとても強い夜でした。母と妹とわたしは、歩道にある防空壕に駆け込みました。そのとき、父は、防空壕の外で周りの様子を見張っていたのですが、そのうちに「そこにいると蒸し焼きになるぞ、みんな早く出ろ！」って言ったんです。

その声を聞いて、わたしも母や妹に続いて防空壕を出ようとする、一緒にいた隣のおばさんが「ここにいなさい、外に出たら焼け死んじゃうよ」と言って、わたしを引き留めてくれました。

でも、わたしはその手を振り切って母にしがみつき、防空壕を出ました。

もう空も周りも地面も、一面ゴーゴーと唸る炎に包まれていました。燃え盛る炎の中、人は燃えながら走っていました。おんぶされた子どもが背中で燃えていても、そのお母さんはそのまま走り続けていました。

逃げている途中、荷台に荷物をいっぱい積んだ馬が立ち往生しているのが見えました。その荷台には火が移って燃え上がり、馬にも燃え移りましたが、馬はじっとその場に立ったままで、決して騒いだりしませんでした。

その手綱を引いていた馬方さんは、馬を最後まで見捨てることなく、そのまま馬

* この作品の「前語り部分」と「後語り部分」は、押井が脚本を制作したものであり、「語り本体部分」は、押井が二瓶治代さんの原作を脚色したものです。

と一緒に焼かれていきました。

そんな火の海の中を必死に逃げている途中、わたしの頭巾に火が付きました。父が「頭巾をとれ！」といったので、わたしはあごの下で結んでいたひもをほどこうとして、父から手を放してしまったんです。

その時、ずっと吹き付けていた強風にあおられて、わたしひとり炎に吸い込まれるように吹き飛ばされてしまいました。

もう、あたり一面が炎に包まれていて、どこをどう逃げたのかわかりませんが、突然真っ暗な場所に出ました。そこだけ火がありませんでした。

大きな建物の陰に、人が一人、立ったまま燃えていました。その炎は赤くは見えず、緑色に見えました。その人が私をじっと見つめて、手を出してきたんです。火に対して怖さはなくて、「消してあげなくちゃ」と思ってその人に近寄り、わたしも手を出しました。

わたしには火を消してあげる頭巾もリュックも、着ていたはずのオーバーも、それから靴もありませんでした。みんなどこかでなくしてしまったんです。だから、自分の手で払いのけてあげようと思って両手を出しました。

すると、後ろから女の人の声が出て「あんた、そんなところに行くと死んじゃうよ！」って言いました。それで、はじかれたようにしてその場を離れたとき、ものすごく熱い何かにぶつかりました。

熱さでハッと我に返って、そのとき、お父さんもお母さんもいない、ということに気づいたんです。するといきなりわたしの腕をつかんだ人がいました。

その腕にぐいぐい引っ張られながら、私は何度も「お父さんの？お父さんの？」と聞き返しましたが、返事は聞こえませんでした。

そしてわたしは、どうしたのか急に動けなくなって、その場にうずくまってしまったんです。そのうちだんだん意識が遠のき、身体が重くて、苦しくて、眠たくなってきました。

時々気が付くと声が聞こえるんです。「俺たちは日本人だッ、俺たちは日本人だッ」「生きるんだッ、生きるんだッ、生きるんだッ」…。

そうしてどれくらいの時が過ぎたのか、あたりがほの明るくなってきたころに、わたしは重なり合う人たちの一番下から引きずりだされました。

気が付いてみると、わたしを連れて走ったのも、一晩中声をかけ続けていたのも父だったんです。

ふと足元を見ると、わたしのうえに折り重なった人たちのほとんどは真っ黒なスミのようになって死んでいました。それを見て、わたしは思わず「こんなになっちゃった…」とつぶやきました。わたしはその焼き殺された人たちに守られて、生きることができたのです。

避難所に向かう途中には、累々と死体が続いていました。スミのように真っ黒になった人、赤ちゃんを抱いたまま焼かれて死んだお母さん、人の形をとどめていない人…。

その人たちを踏まないようにするには、またぎながらつま先立って歩かなくてはいけませんでした。

防空壕から出るときに私を止めてくれたお婆さんも死んでしまいました。あした

の約束をした仲良しだった友達や、近所の人も、みんないなくなってしまうた。こうして、3月10日の夜に、わたしのそばでたくさんの人が死んでゆきました。

<後語り部分>

東京大空襲は、1945年3月10日未明、アメリカ軍が行った夜間・低空爆撃による無差別攻撃です。戦争の間、全国でたくさんの空襲があり、多くの人が命を落とされましたが、その無差別爆撃の中で最初にして最大のものが、この東京大空襲です。戦場ではないはずの東京下町で、一夜にして10万人もの方がなくなりました。その規模は、原子爆弾の被害を受けた広島、激しい地上戦が行われた沖縄に次ぐものとなっています。

戦争を知らない私たちにとって、「戦争」や「空襲」は、なかなか想像しがたいことです。平和な世の中しか知らないのは本当に素晴らしいし恵まれていることですが、それがかえって、戦争の記憶を受け継ぐことを難しくしています。

わたしは今回、二瓶さんの体験を「語る」ということを通して、二瓶さんの8歳の「あの日」にタイムスリップしたような感覚を体験するとともに、二瓶さんの気持ち・その時の状況にできるだけ迫ろうとすることで、これまでにないほど「戦争」「空襲」を自分のこととして感じられました。

私がこうして語りができるのは、二瓶さんがご自分の体験を語ってくださっているからです。実は二瓶さんがこうして語りができるようになるまでには、50数年という、とてつもなく長い時間がかかっています。二瓶さんは、その間も平和のための集会などに参加されましたが、ご自分の東京大空襲の体験を話されることはなかったそうです。今の二瓶さんの語りには、50数年間生きていく中で、二瓶さんが1人でこの記憶の重さ、そしてそれを経験した自分自身と向き合い、迷いやつらさを経験しながらも、わたしたちに「語る」ということを決められた、その時間と二瓶さんの強い思いも一緒に詰まっています。

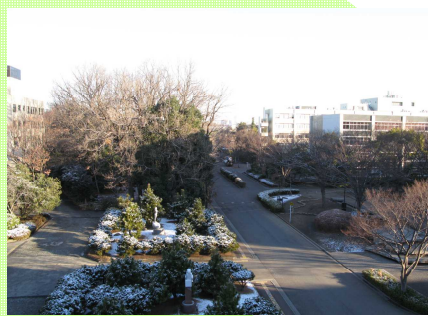
二瓶さんの語りをそのまま表現することはできませんが、今回この語りを聴いてくださった皆さんと、二瓶さんと、そしてわたしとがつながって、「語り」を通してその思いが共有できたらと思います。

変わる埼玉大学図書館と構内遠景



朝日があたる図書館(2014. 2. 8)

来年度は、図書館新館3号館の増築と2号館の改修工事が予定されています。写真の景色も今年限りです。



早朝---図書館前ストリート(2014. 2. 8)

Saitama University Students Presented Short Papers in English at Gakushuin University to an International English Audience

Stacey Vye
Associate Professor
Center for English Education and Development (CEED)
Saitama University

On November 23rd and November 24th, 2013, five Saitama University students presented two different short papers at the Learner Development Special Interest Group (SIG) of the Japan Association of Language Teachers (JALT) conference at Gakushuin University in Mejiro, Tokyo. The conference was entitled, "Exploring Learner Development: Practices, Pedagogies, Puzzles and Research, The 20th Anniversary Conference JALT Learner Development SIG." Amazingly, over 150 presenters and many more guests participated including students, teachers, teacher educators, and researchers who learn, teach, and/or research in diverse countries such as Hong Kong China, Japan, Mexico, Taiwan, Thailand, and the United Kingdom. These participants share a dedicated interest in learning and learner development as teachers are learners too. I was very delighted that our students made a very strong impression on many experts in the field of learner development and learner autonomy in language education. From now, I would like to introduce both of the presentations.

On Saturday the 23rd of November, Iman binti Abd Halim a Master's candidate in the Faculty of Mechanical Engineering, a fourth year student Takumi Kikuchi of the Faculty of Liberal Arts and member of the third group of the Global Youth Program, a fourth year student Saeko Kojima from the Faculty of Economics, and a PhD candidate majoring in Civil and Environmental Engineering and a leading member of the International Association Rahimi Rahman, and I presented our findings in a short paper, "Collaborative autonomy: Stories of flourishing learner development." They were my seminar students who joined a volunteer study about learner autonomy and its connection to language proficiency, which was supported by a Grant-in-Aid for Scientific Research from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). My query was do learners get more proficient in English if they gain control of the content over their learning? Autonomy research suggests the later, but there are not many studies on learner autonomy that also show language proficiency gains on the learners' English placement test scores. Therefore, I considered the reliability of the International English Language Test System (IELTS) exam, especially because these seminar students could take a speaking test with a real interviewer in person instead of with a computer or with the interviewer being on a telephone or on a video call. Then I arranged to give pre- and post-tests of the IELTS test and these results of 20 university seminar students were compared with their autonomous language learning practices that they chose to study for their own pleasure for 23 weeks. The data that was collected were the learners' self-reported reflections, learning goals including the time spent on them, an exit survey, research notes, and the pre- and post-IELTS test scores. This research suggests that language

study plans designed by the learners and their self-reported amount of time spent on the desired learning focus contributed to greater language proficiency if they spent between 6.5 hours to 8.5 hours on studying English for pleasure.

Here is the abstract of our presentation, "Collaborative autonomy: Stories of flourishing learner development," below:

When learners plan their seminars together, the peer-collaboration not only improves language learning proficiency, but also, more significantly, lets incidental learning flourish. An important part of this expansion and growth is encouraging learners to develop reflective practices. These enable learners to plan what they study and notice what they are learning, as they work towards their goals both on their own and with others. In this session, several university students, together with their advisor in a collaborative autonomy research project, will share stories of their flourishing learner development - stories that go beyond the strict bounds of language learning alone.



Image 1 from left to right: Stacey Vye, Takumi Kikuchi, Iman binti Abd Halim

Image 2 from left to right: Rahimi Rahman, Saeko Kojima

In this order Rahimi, Saeko, Takumi, and then Iman spoke about their learner development in English during the 23 weeks of the seminar and then after the seminar as depicted in Images 1 and 2. The students met at the Mejiro station and walked to the Gakushiu campus with the backdrop of the beautiful autumn foliage. We were all a bit nervous to present at such an international environment in a venue with a deep history. When we approached the presentation room in the West building, we felt as if we were staring in a historical movie related to education.

As the time approached before the presentation, I got pretty nervous, however as we started, I did just fine introducing the study and my students. All four of the students shared some things in common as far as having a good command of English, highly motivated in the subject, and all had the experience of currently or previously living and studying abroad in another country. They each spoke for five to six minutes at length while showing photos of their eye-opening experiences using English with memorable photos of the occasions and then answered some difficult questions very diligently to the audience. It was a wonderful day to remember and a great birthday present for me to see our Saitama University students deliver such a powerful presentation about their learning experiences, all in their second language.

On the following day on Sunday, November 24th, a Saitama University first year student who is majoring in the Faculty of Economics and a member of the fifth group of the Global Youth program Mitsuki Kato did a solo presentation entitled, "Learner identity and motivation." Mitsuki had taken my English for Specific Purposes (ESP1a) course on the subject of learner autonomy in language education and the theme for the semester was language learning histories in the Semester A of 2013. In this course, students get to analyze their own learning styles and successful study practices in order to be more motivated and direct their own learning through a wide range of activities. In the course, Mitsuki and her classmates created language learning history presentations and then a final paper through a series of questions the students chose that relate to their English studies in the past, in the present, and their future English plans. This activity was chosen because if language learners reflect on their learning past and present, then they often are more able to set powerful language goals in the future, which also serves as a motivational tool for learning.

This is Mitsuki's abstract for her short paper on "Learner identity and Motivation":

I am a freshman, and although many months have past since I entered university, I am still not used to many English classes. However, I do not mean this in a bad way. On the contrary, it has a positive meaning for me. Recently, I have come to think that experiences in which I feel, I don't understand are important. Frustration and feelings of regret drive me to study English more, and in this paper, I will try to explain the importance of attitude and how it can support the studying of English.



Image 3 center: Mitsuki Kato



Image 4: Participants discussing their Language Learning Histories

Mitsuki practiced her presentation in the weeks before the short paper was delivered with a Teacher Assistant Shun Kozaki who is a fourth year student also majoring in the Faculty of Economics and a member of the second group of the Global Youth Program and myself. On the day, Shun helped with moral support, introduced Mitsuki at her short talk, and also provided the photos, which are Images 3 and 4. Mitsuki divided her presentation into two parts. The first of which she spoke about her experiences as a language learner with colorful photos and images to illustrate her points and then spoke of her future language goals as shown in Image 3. Then, second, she asked the audience to experience speaking about their own language learning histories as well with a series of prompt questions such as:

1. "When and how did you start learning a foreign language? What memories do you have about this?" "How do you feel about using the foreign language now?"
2. How about your speaking ability, listening ability, reading ability, writing ability in this language?"
3. "How do you want to use this language in the future?"

During the later half of the short talk also shown in Image 4, Mitsuki got her audience into small groups and they robustly discussed their language learning histories where many of attendees were teachers. This audience inclusiveness was the aim of the conference full of rich in audience participation, which she demonstrated skillfully. Then finally, Mitsuki bravely tackled some difficult questions by the audience. Shun and I were so very proud of her fantastic efforts and success.

All and all, this unique format for a conference where students are able to speak out about their learning needs and goals to their audience went very well. In addition, and as mentioned previously, there were many participants who were language educators around the world in the audiences of both short talks. These experiences seemed to demonstrate that my students got to teach the teachers including myself meaningfully and effectively. I really recommend and encourage teachers to ask their students to present at conferences if the students are up for it because they not only rise to the challenge themselves to raise their knowledge of the subject matter and improve their skills, but the teachers get to know more deeply about their students learning needs and styles so that the teacher can create more informed class sessions and seminars. I deeply appreciate these five students and have learned a lot from their English language proficiency and personal and professional development.

Note: The conference URL can be found here: <http://www.ldsigconference2013.org/>

The Author

Stacey Vye, is an Associate Professor at Saitama University at the Center for English Education and Development (CEED) in Japan. Her research interests and publications focus on exploring reflection, EFL college preparation for studying abroad, learner and teacher autonomy in language education including the connections between both capacities. She has also been on the Learner Development SIG of JALT Committee in Japan, serving various positions for 10 years. She can be contacted at <vyesl@mail.saitama-u.ac.jp>.

埼玉大学学生の小論文の英語による発表—学習院大学・国際学会参加者を前に—

Stacey Vye (埼玉大学英語教育開発センター・准教授)

(日本語訳)

2013年11月23日、24日、全国語学教育学会(JALT)・学習者ディベロップメント研究部会(SIG)による国際会議、“学習者の発展を探求：実践、教授法、課題そして研究 JALT学習者ディベロップメント研究部会20周年記念大会”が、東京目白の学習院大学で開催されました。学生、教師、教師教育者、研究者など、発表者を含め150名以上の参加がありました。香港、中国、日本、メキシコ、台湾、タイ、イギリス、と参加者の国は多様でした。参加者らは、自らもまた学習者として共通して語学学習と語学教育に熱心に関わり、学習者の発達に強い関心を持っています。とても嬉しかったことは、埼玉大学の学生が、語学教育における学習者の発達と自律(autonomy)の問題を専門分野にする参加者にとっても強い印象を与えたことです。そのときの発表を紹介しましょう。

11月23日に以下の5人で発表を行いました。Iman binti Abd Halim さん(機械工学科修士課程2年生)、Takumi Kikuchiさん(教養学部3年生、Global Youth 3期生)、Saeko Kojimaさん(経済学部4年生)、Rahimi Rahmanさん(都市環境学科博士課程、国際交流協会主要メンバー)、それに私Staceyの5人です。発表テーマは“協同的自律：協同作業を通し自律・学習者の発達を堅実なものにする学習史”でした。4人は私のゼミの学生で、「学習者の自律」「自律と語学習熟の結びつき」に関する研究に自発的に参加しています(JSPPSの助成金を受けている研究プロジェクト)。自らの学習内容を学習者が自分で決めることができるなら、学習者はもっと英語に習熟することができる、これが私が明らかにしたい課題です。学習者の自律に関する研究や自律が語学習熟に効果があり「振り分けテスト得点」に反映することを示す研究は、あまり行われていません。そこで、アイエルツ(IELTS)の試験の信頼性を考慮することにしました。なぜならこのテストでは、コンピュータや電話、ビデオによるものではなく、対面で面接官と話すテストを受けることができるからです。そのため、IELTSテストを事前—事後に実施するように計画し、ゼミ生20人のテスト結果を、彼らが自分で進んで23週間勉強しようと選択した自律的言語学習の取り組み(practices)と比較しました。収集されたデータは、学習者が自らの振り返りについての報告と、学習目標及び学習目標達成に費やした時

間、出口調査(exit survey)、研究記録ノート、そして事前—事後のIELTSテストの得点でした。この研究は次の示唆を与えてくれました。つまり、学習者によって計画された語学学習計画と、自分で学習しようと決めたことへの取り組み時間量の自己報告は関係があり、学生が6.5時間～8.5時間自発的に英語学習に向かうなら、語学習熟に大いに役立つということです。

"協同的自律：学習者の発達を堅実なものにする学習史"の発表の概要を以下に紹介します。

学習する学生たちが、みんなでゼミを企画するとき、仲間との協同作業は、語学学習への習熟を改善するだけでなく、付随的な学習も大きく促すのです。この実践の応用と発展の重要なところは、学習者の内省的な学習の取り組みを促すことです。これらの取り組みの過程は、学習者が自分自身の目標と他の人の目標の両方に向かって作業をする中で、自分が学ぶことを企画するすることを可能にし、さらに自分が何を学んでいるかに気づかせるのです。この発表では、協同的自立学習研究のアドバイザーと共に数人の学生が彼らの語学学習を発展させる体験談を共有します。そしてそれは単なる語学学習の域を超えるものです。

Rahimi さん、Saekoさん、Takumiさん、Imanさんの順に、23週に及ぶゼミ期間中とその後の学習者の英語習熟の過程を発表しました。写真1と写真2を参照してください。目白駅で待ち合わせ、紅葉の美しい学習院大学のキャンパスに入りました。国際的な環境の深い歴史ある会場で発表するとあって、みな緊張していました。西館の発表会場に近づくにつれ、まるで歴史的な教育映画の俳優になったかのような気分になりました。一旦始まると研究と学生の紹介はうまくいきました。4人全員に共通するのは、英語に堪能で、このテーマに強く興味を持ち、また今までに海外で生活し、勉強した経験を持つことでした。各自が5～6分英語で、自分の目を開かせてくれた経験を、思い出に残る写真を適宜使いながら、発表しました。会場からの難しい質問にも誠実に答えていました。この日は、私にとって記念すべき日でしたし、すばらしい誕生日プレゼントになりました。埼玉大学の学生が、自らの学習経験を第二言語である英語で力強く行う発表を見ることができたのですから。

二日目の24日、経済学部1年生、Global Youth 5期生の Mitsuki Katoさんが、“学習者のアイデンティティと動機づけ”と題する発表を行いました。Mitsukiさんは、私の授業“特定の目的のための英語”(EPS1a)コースを受講している学生です。この授業では、語学学習における学習者の自律を主題にしています。半期の授業テーマは、“語学学習の体系的な記述(自分の学習史)”でした。このコースでは、学生は自分の学習スタイルとうまくいった学習への取り組みを自己分析します。広範囲の学習活動を通じて、動機づけをさらに高め、自分の学習を方向づけ管理するために分析するのです。

このコースでMitsukiiさんとクラスメイトは、語学学習の自分史を発表し、学生が選び出したいくつかの質問を利用して、最終的な小論文を作成しました。質問は、自分の過去と現在の英語学習、これからの英語学習の計画に関するものです。この活動は次の理由で選び出されてきたものです。つまり、語学学習者が、自分の過去と現在の学習を振り返って深く考えることで、彼らはしばしば語学学習の目標を設定する遅い力を身につけ、さらにこの能力は学習への動機づけの手段としても役立つからです。

Mitsukiさんの小論文“学習者のアイデンティティと動機づけ”の概要を紹介します。

私は新入生です。大学に入学してからすでに何ヶ月も経ちましたが、未だに英語の授業にはあまり慣れていません。でも私はこのことを否定的にとらえていません。かえって、私にとって積極的な意味があると思っています。最近、私は自分が感じる経験を理解していないことは、重要なことだと考えるようになりました。フラストレーションや後悔の感情は、英語をもっと勉強するように駆り立てますし、この小論で私は態度の重要性和、その態度がいかに英語の学習を支えているものであるかを説明してみたいと思います。

Mitsukiさんは、小論文を発表する数週間前からアシスタント教員のShun Kozakiさん(経済学部4年生、Global Youth 2期生)、そして私と共に練習をしました。当日は彼女の精神的なサポートをしながら、発表で彼女を紹介し、写真提示の手伝いをしました(写真3、写真4参照)。Mitsukiさんは、発表を2部構成で行いました。第1部では、語学学習者としての彼女の体験を鮮やかな写真を用いて話し、これからの語学学習の目標について発表しました。第2部では、会場の参加者に、自分の語学学習の自分史について話す経験をして

いただきたい、と話しかけました。そして、導入として次の質問をすることから始めました。

1 みなさんは、外国語の学習をいつ、どのようにして始めましたか？そして、始めた頃のもので、どんな思い出がありますか？いま、外国語を使うことをどう思いますか？

2 みなさんの英語を話す力、聴く力、読む力、書く力はどのくらいですか？

3 これから先、どのくらい英語を使いたいと思いますか？

短い発表時間の後半で(写真4参照)、Mitsukiさんは、会場のみなさんを小グループに分け、話し合いをする機会を持ちました。参加者の多くは教師でしたが、語学学習の自分史をしっかりと話し合いました。この実践的取り組みは、出席者の積極的な参加を進める会議の目的であり、彼女はうまく実施することができました。最後に、Mitsukiさんは、会場から出されたいくつかの難しい質問に、正面からしっかりと対応していました。Shunさんと私は、彼女の素晴らしい努力と成功を誇りに思っています。

学生が自分の学習要求と目標について聴衆に向かって堂々と話すことができるこの会議のユニークな形式は、とてもよかったと思います。すでに触れましたが、会場には、世界中から多くの語学教育者が参加していました。この会議での経験は、私のゼミ生が、私も含めた教師に有意義かつ効果的に教えることができたことを例示するものです。私は、教師に次のことを推奨し、勇気を持って取り組んでほしいと思います。つまり、学生が前向きに積極的になってきたら、学会で発表することを勧めるといことです。それは、発表することで、学生は、題材に対する知識を進んで増やそうとし、技能(スキル)を向上させようとするようになるからです。それだけでなく、教師は、学生の学習スタイルをより深く知るようになり、その結果、より詳細な行き届いた授業やゼミを展開できるようになるからです。私は、この5人の学生を心から評価します。また、彼らの英語学習への習熟過程から多くのことを学びましたし、私個人として専門教師としての発達についても学ぶことがたくさんありました。

(校閲・栗原佳世, 訳・坂西友秀)

定時制高校

いまどきの定時制高校

戸賀沢亮子

埼玉県立川越工業高校 定時制 養護教諭

みなさんは、「定時制高校」と聞くとどのようなイメージを持たれるだろうか？

昼間働いて、眠い目をこすりながら夜学で学ぶ。家族を養うために働いている。中学を卒業した後、地方から上京し、会社の寮で暮らしている。それらが、かつての定時制高校であった。

現在の定時制高校はどのような実態であるか？各資料をひも解きながら、今どきの定時制高校の全国的な傾向について述べる。

文部省が高等学校の定時制・通信制課程は、学校教育法制定時（昭和23年）から設けられている制度で、創設の趣旨として、定時制の課程においては、中学校を卒業して勤務に従事するなど様々な理由で全日制の高校に進めない青少年に対して高校教育を受ける機会を与えてきた。また、通信制の課程にあっては、全日制・定時制の高校に通学することができない青少年に対して、通信の方法により高校教育を受ける機会を与えることを創設の趣旨【1】としてきた。しかし、近年においては、従来からの勤労青少年に加えて、全日制課程からの転・編入学する方や過去に高校教育を受けることができなかった方など多様な入学動機や学習歴を持つ方が増えてきている。

高等学校における生徒数は、1990年に約579万人（全日制約548万人、定時制約15万人、通信制約15万人）をピークに人数

が減少し、2012年には約355万人（全日制約324万人、定時制約11万人、通信制約19万人）であり、全体の総数が約220万人減少したのに対して、定時制と通信制の生徒数の合計数に大きな変化はない

【2】。定時制入学者の内訳をみると、83.2%が中学校新卒者であり、中学校既卒者16.8である。就業状況においては、無職が58.0%と最も多く、次いでパート等39.3%である。正社員は、わずか1.5%である。かつて高度成長期において、地方から集団就職で出てきた金の卵と呼ばれる中卒労働者の「働きながら夜学ぶ学校」のイメージとは大きく変化している。1982年の定時制の生徒は、68.4%が定職に就き、アルバイト14.3%、無職は17.3%であったことと比較すると、就業状況に大きな変化がある。入学の動機・理由については、「高等学校の卒業資格が必要だと思ったから」30.4%が最も多く、「自分のペースで学習がすすめられると思ったから」15.6%、「全日制の高校を受検したが、合格しなかったから」12.9%と続く。「経済的に働く必要があったから」という生徒は、11.1%である。従来の勤労青年のための教育機関としての役割だけでなく、生徒の減少に合わせて、全日制の高校が統廃合され、定時制高校が、通常全日制に通っている生徒の進学先として選択されてきている。また、他の高校を退学した後、定時制・通信制は、「学びなおし」の場所にもなっている。

しかし、定時制課程における不登校生徒の割合は、15.7%であり、高校平均の9.2倍である。また、中途退学者の割合は、11.6%であり、高校平均の7.3倍である。定時制課程に入学することによって不登校になったり、高校中退に結びつきやすいわけではなく、全日制中退経験者、中学校までの不登校経験者や、過去に高等学校教育を受ける機会がなかった者など、様々な入学動機や学習歴を持つ者が多くなっているため、入学の時点ですでに全日制の高校より、様々な困難を抱える生徒が多いといえる。例えば、高校進学者の2.2%が中学校において発達障害等の特別支援教育が必要とされていたのち、定時制課程に14.1%、通信制課程に15.7%の生徒が在籍していることが推定されている【3】。

さて、私が勤務する定時制高校では、15歳から70代の生徒約250名が学んでいる。中学時不登校、もしくは教育相談室登校だった生徒が、入学後間もない時期から、友人と共に生き生きと教室で学んでいる姿も珍しくはない。経済的理由により、家計を支えながら学んでいる生徒もいる。全日制の高校を中退したのち、「やはり高校だけはでなくちゃ」と入学してくる生徒もいる。押し並べて共通するのは、家庭の経済状態に恵まれていないことである。風邪をひいても医者に行くことを躊躇する、虫歯が痛くても歯医者へ行けないなど、あるいは一カ月5000円の給食費が払えない等の家庭の経済問題が、生徒の生活にも大きな影響を及ぼしていることを感じない日はない。特に、三位一体の改革【4】以降、定時制への補助金は減額されていて、給食についても、栄養技師が未配置であったり、完全給食ではなく、パンと牛乳だけの補食になっている県や学校もある。

本校の生徒は、夕方5時から温かくお

いしい給食をとったのち、夜9時まで4時間の授業を受ける。ゆっくりと丁寧に教えてくださる先生方の姿勢に、入学まで、勉強を諦めていた生徒も次第に「学ぶこと」を始める。放課後には、部活動に参加し、夜間照明の中で汗を流す生徒もいる。

定時制高校の「学びなおし」は、勉強だけでなく、生活リズム、体力づくり、人間関係作りなど、「ヒト」が「人」として生きていくために必要な基礎の学びなおしだと言える。

「てーじ」。つくづく不思議な空間である。後7年、どんなドラマがあるかわからないが、養護教諭人生の締めくくりの場として、生徒と共に過ごして行こうと思う。

続いては、昨年度埼玉大学大学院を修了し、2013年4月から私と同じ定時制高校に配属された高野大樹さんの「新採用記？」をご紹介します。

【注】

【1】 文部科学省「定時制・通信制について」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shoutou/kaikaku/seido/04033103.htm

【2】 平成23年度文部科学省委託事業「高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する研究」（公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo3047/siryo/icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336_2.pdf

【3】 文部科学省 特別支援教育の推進に関する調査協力者会議 2009

【4】 中川真 「平成17年度補助金改革（三位一体の改革）について」 に関する調査協力者会議 2009 <http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1022127/> www.mof.go.jp/finance/fl1702i.pdf

定時制高校の教師人生

高野大樹

埼玉県立川越工業高校 定時制 保健体育教員

私が本学大学院を修了し、高校教員となって早くも1年が過ぎようとしている。当初「定時制」と聞いた時に抱いたイメージは「金髪・ピアスのヤンキー集団に、ポツポツと年配の方たち」がクラスを構成し、体育では「教師の指示も聞かず、ヤンキー生徒が体育館の端でケータイとジュースを持ってゲラゲラと笑い、それを横目に年配の方がおぼつかない動きで一生懸命ドリブルをする」といった具合である。学力や素行に問題のある生徒が多く、教師の指導など一握りの生徒しか聞かない、そんな学校をイメージした。配

属先を「定時制」と聞いてから、「そんなところで本当に教師としてやっていけるのか？」などと不安を感じる日々を過ごしたことを昨日のこのように覚えている。

しかし、日が経つにつれ「定時制」というある意味「特殊」な空間で学ぼうとする生徒には、単に学力や素行以外にも「定時制」に通おうとした様々な理由があると考えるようになった。そして、その理由を知りたいと思うようになっていく自分がいた。4月、授業でいよいよ生徒との対面。私は驚いた。金髪・ピアス



「人間関係づくり！」



温かくておいしい給食

のヤンキーや年配の方たちもほとんどいないのである。私服を着ていること以外は普通の高校1年生が目前にいる。「ホッとした」というのが率直な感想だった。私はすかさず、休み時間にいろいろな生徒に入学動機を聞いてみた。すると「経済的な理由で昼間バイトしなくちゃいけない」「全日制を退学して働き始めたけど、やっぱり高卒資格が欲しくて」など積極的な理由もあれば、「昼夜逆転して朝起きられない」「全日制は学力的に無理と言われたけど、とりあえず高校は卒

業したいから」など消極的な理由もあった。素直に「おもしろい」と思った。

そんな私は次に「この生徒たちに何が必要なのか」ということを考えるようになった。しかし、その答えは体育の授業を通して、意外にも早く見えてきた。授業中に体育のセオリーとは全く逆の現象が起こったのである。それは、集団スポーツは盛り上がりせず、個人スポーツは盛り上がるという現象だ。通常、バスケットやサッカーはみんなが大好きで、一番盛り上がるといっても過言ではないスポ

一ツだ。しかし、定時制の生徒は全く盛り上がらない。むしろ卓球やバドミントンや長距離走など個人スポーツの方が断然盛り上がるのである。そんな姿から、ここの生徒たちに「人間関係づくり」の必要性を感じた。

そのため、授業では生徒同士で話し合いや教え合いをさせたり、試合前にはチームで円陣を組ませたりするなど、人と人との触れ合いを大切にする時間を意識的に設けている。加えて、話し合いなどがしやすいように私も積極的に生徒の間に介入指導するように心がけている。まだまだ大きな成果は感じないが、少しずつ生徒達が変化しているのをありありと感じている。「生きるために大切なことを、できるようにさせる」。やはりこれが私たち教師の大切な役割だと思う。

また「定時制」の生徒たちに気付かされることもたくさんある。特に体育の技能指導では色々なことに気付かされる。生徒たち個々の運動技能はおせじにも高いとは言えない。グローブの付け方もわからなければ、自分がどちらの腕で投げ

ればよいのかさえもわからない。さらには「最近、いつ走ったかわからない」と言うほどだ。つまり、私たちにとっての「当たり前」が、生徒たちにとっては「当たり前にならない」のである。そこで私は「できない生徒の感覚がわからない」ということに気付かされた。大学院時代、「運動をうまく教えるためには、できない生徒の感覚をわかることがはじまり」と教えられたことの意味がわかった瞬間だった。「定時制」の生徒たちに運動技能をうまく教えることができれば、どんな学校でも教えることができるのではないか。そんな期待を胸に、暇さえあればできない生徒の真似をして必死にその感覚をつかもうと努力している。

「定時制」。配属前は不安でいっぱいだったが、今は楽しくてしょうがない。指導によって生徒たちがどんどん成長すると同時に、生徒たちによって私自身も成長させてもらっている。そんな最高の環境に心から感謝したい。始まったばかりの教師人生、生徒と自分の成長に期待しながら突き進んでいきたいと思う。

「図書館と県民のつどい」に展示

生き物にとって必要不可欠な水。21世紀の今日においても依然として深刻な洪水や渇水等水を巡る様々な問題が発生しています。本学では、身近にある河川について関心を持って学ぶことで、河川との関わり



から「水問題について考えていただく」をテーマに埼玉県

の母なる川「荒川」の資料を中心に河川に関

連する資料の展示を行いました。今回の展示では、展示内容についてのクイズ形式の設問を用意し、来場者とスタッ

河川の国 ～荒川を中心に～

フのコミュニケーションを図りました。来場者からは、本学の教員や附属学校の教諭が作成に協力した小学生向け教材資料や現在県が行っている「川の再生」の取り組みについてご質問をいただくなど河川について認識を深めていただく貴重な機会になったと思います（2013.12.1桶川市民ホール・さいたま文学館で開催）。

また、埼玉大学図書館の所蔵する資料が県内公共図書館を通じて取り寄せできる「埼玉県内図書館ネットワーク」のサービス等、当館の行っている地域連携活動についても紹介しました。

（情報サービス担当 柴原秀美・山岸路子）



「肥後の猛婦」の独り言

城川 由美

熊本大学図書館・ユニット長

熊本市観光情報サイト (<http://www.manyou-kumamoto.jp/contents.cfm?id=722>) にこう書いてありました。『男性の「肥後もっこす」に対して「肥後の猛婦」と呼ばれることもある火の国、熊本の女性。肥後もっこすとは熊本の男性の一本気で不器用な気質を表現する有名な言葉です。この「肥後もっこす」の気質は、女性にも共通すると言われていて「熱く、頑固でパワフルな女性像」がこの「肥後の猛婦」として思われてきた節があります。』

坂西館長からの“熱く、頑固でパワフル”なご依頼に、とうとう負けてしまいました。何か物を書くなど、夏休みに作文の宿題を嫌々済ませたのを最後にもう何十年もご無沙汰しています。乱筆乱文はどうぞご容赦下さい。

そんな学生生活から解放され、国家公務員に採用されて三十数年が経ってしまいました（はっきり言えない年数です。あえてアバウトに…）。その間、結婚、3人の子どもの出産・育児、そして親の介護。良くやって来ましたねと言われますが、女性職員の誰でもやっていることです。家の玄関を出た瞬間から家のことは忘れ、職場の門を出た瞬間から仕事のことは忘れず。「同期の〇〇さんが係長に昇進したよ。」「△△さんは手を上げて課長として出て行くことになったそうだ。」そんな話には「人は人。私は産休で休んでるし。早く家に帰らないといけないから、残業できないし。自分には関係ない。」と、目の前だけを見続けてきました。

さて女性の皆さん、“女性には怖い物がない”と思ったことはありませんか？仕事で意見が合わないとき、「それ、違うと思います。」と思いきり良く発言しませんか？男性にはおわかりにならないかもしれませんが、ホントに女性って怖い物がないのです。だから自分が「違う」と思うことに対しては、たとえ上司にでも思い切りよく物申してしまいます。

周りに流されることなく、自分の思いをはっきりと発言することはとても大切です。

先日、NHKのクローズアップ現代で「フェイスブックCOO サンドバーグ氏に聞く」(http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3377_all.html) というのがあっていました。ご覧になられた方も多と思います。たまたま付けていたテレビで流れていたのが目に入ったのですが、だんだん目が離せなくなり、いつしか家事の手が止まっていました。

インタビューの中で一番心に残ったところが（少し長くなりますが）次の部分です。

女性リーダーが増えることは、ほかの人のためにもなる、そう信じています。

また上のポストに就くと、楽になることも増えます。

「CEOになりたい？」と女性に聞くと、「まさか、大変ですもの」と首を振りますが、「会議では誰のスケジュールが優先される？」と聞くと、みんな「CEOのだ」と答えます。

ほらね、あなたがCEOなら、会議は、あなたの都合に合わせてくれるのです。

上に行けば行くほど、実は、やりやすくなるんです。

（マラソンが途中から楽になってくるということですか？）

いつもどんな時も、というわけにはいきませんが、楽になります。

自分だけでなく、周りの人も楽にしてあげられるのです。

（上記、NHKクローズアップ現代HPより）

サンドバーグ氏のインタビューを聞いていて心に浮かんだのは、“「怖い物がない」と思うこと……ひょっとして、その根底には『昇進なんて私には無関係』という思いがあるのかな”ということでした。サンドバーグ氏が仰っているように“女性に偉くならない（なれない）”という意識を男性のみならず女性自身が無意識のうちに持っている」ことの現れなのかもしれません。

男女雇用機会均等法（古くて済みません）、男女共同参画、ワークライフバランス、イクメン等々、もう随分長いこと社会全体でいろんな言葉、いろんな形で男女は同じ>ということをアピールしています。その甲斐あってか、最近の若い方は、男性も喜んで家事をされている話しを良く耳にします。うれしいことです。

男性も女性も同等に家事をし（男性が家事・育児をすることが“お手伝い”でないことを願っています）、同等に仕事をする、それは、家事や育児に責任を持つと言うこと、仕事に責任を持つということに他ならないと思います。

仕事に責任を持ち、仕事の質を上げる努力をし、ひいては社会に貢献する。その実現のためにはそれなりのポジションが必要なことは、今更言うほどのこともないでしょう。会議に出ると、周りは男性ばかりと言う経験をされた女性も多いでしょう。そんなとき「世の中は男女半々なものだから、この場にももっと女性が居るべきだ」と思います。

女性自身の奥深いところに潜んでいる“女性は偉くなんかならなくて良い”という意識を変えることが、世の中を変える第一歩になるのかもしれない。

「違う」と思うことには堂々と「違う」と言うべきです。しかし、「どうせ、上になんかならないのだから、どう評価されようと構わない」という気持ちではなく「違うと思う、その中味については是非、評価して欲しい」という思いを込めて。

おとなしい性格の私(?)ですが、肥後の猛婦の専売特許“熱く、頑固でパワフル”に人生を歩んでいきたいと思います。

女性が変われば社会は変わる。一歩前へ踏み出しましょう。

最後にもう一つ、サンドバーグ氏の言葉です。

女性に、一歩前へ、と励ますのと同じように、男性には、台所に立って、と励ます必要があります。

それは、何より家族や子どもにとっていいことなのだ、と分かってほしいのです。

男性を励ますべきです。

そして、育児という大事な仕事をする、すべての男性を尊敬すべきです。

(上記、NHKクローズアップ現代HPより)

おまけにもう一つ。

熊本大学附属図書館中央館は、2013年10月1日（火）リニューアルオープンいたします。お近くにお越しの際は、是非お立ち寄り下さい。

熊本大学附属図書館中央館
平成25年10月1日(火)リニューアルオープン

「動」-1F
・多目的学習サポートエリア
・アクティブラーニング
・グループ学習室 (3室)
・ラウンジ・休憩室

「静」-2F
・読書エリア
・ラーニング・サロンの閲覧室
・PCルーム

「音」-8F
・音楽
・多目的ラウンジ

附属図書館中央館
改築前(外観) 改築後(外観)
改築前(内観) 改築後(内観)

■工期
着工 平成24年10月
竣工 平成26年7月

■工事費 約 732,000 千円

■建設仕様等
構造 鉄骨コンクリート造
階 地上5階 地下2階
改築面積 5,000 ㎡

■施工仕様
電気 指定電気料1線分岐
配線 指定配線用ケーブル
内装 指定内装材料
床 指定床材
照明 指定照明器具

■設備
電気 1棟
給排水 1棟
空調 1棟

■建築設計
空間設計の形態 既設庁舎、新設計
空調設計の形態 空調機、換気機
照明設計の形態 照明器具、照明器具の配置
設備設計の形態 設備器具の配置

〇〇緑地の再生 附属図書館の空調機、換気機、照明器具の配置

教職員・学生・利用者の皆さんへ！ 図書返却のお願い！

転勤、退職、卒業など、異動される教職員・学生・利用者の皆さんが多くなる時期を迎えました。借りた本を返却しないまま大学を去る方も少なくありません。中には貸し出し期限が過ぎても40冊近くの本を借りたままの方もいます。未返却図書の問題は、監事監査でも厳しく指摘されております。未返却図書をお持ちの方は、すぐに返却くださるようお願いいたします。

返却期限が過ぎた図書館の本はありませんか？
返却期限の御確認をお願いします。


未返却の図書を返却してください！

図書は大学の **大切な財産** です。
教員、学生、利用者みなさん！
よろしくお願いいたします！

「第3回図書館会議」の開催

1月27日(月)、第3回図書館会議が開かれました。年度内の予算執行に関わる報告と協議が行われました。高額図書の購入は、当初各学部から出された希望に沿って進めております。国内雑誌も、従来の購入額を考慮して調整しながら、希望に応えるべく対処しております。現下の最大の課題は、新3号館(仮称)の増築と2号館の改修工事に伴う館の運営と開館の維持です。工事で蔵書を移動せざるをえず、閲覧・学習スペースが狭くなります。可能な限り利便性を維持するよう検討しております。ご不便をおかけすることになり、すみませんが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

(図書館長 坂西友秀)



けやきの窓

♪ # ♪ 北欧スウェーデンの暮らし ♪ # ♪

北田 礼
(教育学部4年 スウェーデン・リンショーピン大学交換留学生)

私が留学しているのは、スウェーデンのリンショーピン大学です。リンショーピンはスウェーデンで第5の都市。2013年8月から8ヶ月間、交換留学生として派遣されています。

北欧はさぞや寒いだろうと服は長袖だけをスーツケースに詰めて、真夏の日本からスウェーデンへ出発しました。実際、空港から外に出た時の印象は、「涼しい」。8月のスウェーデンはからっと晴れた空と穏やかな風の吹く日本の初秋の様でした。そして驚いたことが、「夜の11時でも明るい」。夏の時期は過ごしやすい気候と外の明るさに相まって時間を忘れ友人とはしゃいでいました。しかしその日没時間は日に日に5分ずつ早まってきました。黄葉がきれいと思った2週間後には寒風が吹いてさみしい風景に早変わり。スウェーデンでよく言われる、「長く暗くてつらい冬」の到来です。です

が今年は暖冬で初雪を前年より1ヶ月遅れた11月に迎え、その雪も後に続いた晴天で融け、実際に白銀の世界が続くようになったのは1月を過ぎてからのことでした。気温も昨年度比で10℃ほど高いようです。今年の留学生はラッキーです。

北欧は税金の高さで有名で、消費税がべらぼうに高く25%です。と言ってみましたが生活必需品はそれが低く設定されていて、食料品は12%ほど、書籍は6%の税率で購入できます。そのため、贅沢をしなければ普通に普通の生活を送ることができます。ヨーロッパ生活はパスタが主食になるかなと考えていたのですが、実のところ私は主食にお米を食べています。スウェーデンは移民を多く受け入れているお国柄、お店に食材が種類豊富に並んでいて、お米もタイ米のように細長いものや日本米の様に厚みのあるものなど数種類あります。値段もそこまで

高くなく、私の食べている日本米に近いお米は220円/kgです。味にも満足しています。月の食費は1万円ほどでしょ

うか。(1スウェーデンクローナ=15.5円で換算しました。)



コリドーメイト



図書館（のあるD棟の）外観

住まいは大学へ自転車5分の学生寮です。一人一人が20㎡の個室（バスルーム付）を持ち、共用部にキッチンとリビングルームがあるソーシャルアパートメントの形態で、男女混合の8人の学生がともに暮らしています。8人それぞれの個室がひとつの廊下（コリドー）でつながっているの、寮は「コリドー」の愛称を持ちます。コリドーの雰囲気はコリ

ドーそれぞれで異なり、食事を自室で取って会っても挨拶だけと交流の少ないところもあれば、リビングで食事を一緒に取ってたまにパーティを開いたり仲良しのところもあります。私のコリドーは後者で、(嬉しいですね、)6人のスウェーデン人学生と2人の留学生で、誕生日やクリスマスと一緒に祝ったりと和気あいあいとやっています。家賃は全て込で



壁のアートも印象的な地下通路



図書館の中(1)

48,000円、安くはない額ですがリビングに出れば誰かに会えて、でも自分の空間はしっかり守れるというこの距離感がとても気に入っていますし、メンバーもとても大好きです。

さて、大学の話題に移ります。リンシ

ョーピン大学は学生27,000人を抱える、スウェーデンで6番目の規模の大学です。キャンパスを4つ持ち、大学病院併設のキャンパス、教育科学部の授業が多く行われるキャンパス、家具作りに特化したキャンパス、そして学生寮の最寄り

で一番の広さを誇るメインキャンパスの4つです。主にメインキャンパスについての話になりますが、その設備には目を見張りました。まず驚いたのは地下通路の存在。この通路はキャンパス内の主要棟を結んでいるので、違う棟への授業移動の際、特に悪天候の際重宝します。私は通学の際これを利用していてコリドーから最も近い講義棟で地下通路に入り、講義の行われる棟まで、距離にして大学会館～サークル会館ほどでしょうか、手袋いらずで歩けるのでこのありがたさを楽しみ感じています。また、キャンパス内は建物内外を問わずいたるところにテーブルセットが置かれています。しかもそのデザインのかわいいことといったら。木製のセットだったり、ふかふかのソファだったり、場所によって種類が違うので用途や気分に合わせて選び分けることができおもしろいです。それから大学の図書館について。リンショーピン大学は4つのキャンパスにわたって5つの図書館を持っています。私は大学図書館を授業の教科書や参考書を借りたり

文学書を借りたり、学生用の無料コピー機でスキャンした書類をパソコンに送付したりと利用しています。図書館内で勉強している学生もいますが、前述の通り構内のあちこちに勉強スペースがありますので「図書館＝勉強」の方程式はリンショーピン大学では成り立たないかなと思います。また、試験専用の部屋があることにも驚きました。そこは机が条坊制の街を彷彿させるかのように整然と並んでいる部屋で、400人ほどの学生が十分な間隔を保った状態で試験を受けられるかなりの広さです。リンショーピン大学は施設の充実さもとい、授業内容や各種学業支援などかなり学生サービスが充実している大学と感じています。いっばしの留学生に地元の小学校での教育実習の機会をくれたり、40km離れた隣町にあるキャンパスとをつなぐバスを無料運行してくれていたたり、リンショーピンの街の観光ツアーを催してくれたり等々。さすが教育福祉が充実したスウェーデンの大学です。

全体的に見て、私はリンショーピン大



図書館の中(2)



図書館の中(3)

学での暮らしにとっても満足しています。もちろん楽しいことばかりではありません、凍った道で自転車で転んで恐かった経験もあります、授業が前日に休講になって（当日に、もありました）寒い中せ

つかく学校に来たのにと地団駄をふむことも、たまに散らかるコリドーのキッチンに嫌気がさすこともあります、12月には午前9時日の出、午後3時日の入りの体内時計を狂わす日照時間にも悩まされま

した。でもなんだかんだそれも思い出のひとつとしてこの留学生活を楽しくさせてくれていると感じますし、よい環境にもよい仲間にも恵まれている私はたいそうな幸せ者だなどしみじみ思います。さ

て、帰国後は埼玉県の教員採用試験の受験を予定しています。未来の児童たちに興味を持ってもらえるようなおもしろい話をしこたま仕込むべく、残りの留学生活も楽しみたいと思います。

図書館3号館増築と2号館改修のお知らせとお願い



図書館新館イメージ図

埼玉大学図書館の東側、現在の入口階段部分のスペースに新たに「自主的で自由な学習」を促進するため新館を増築します。工事期間は来年度を予定しております。3階建の新館には、少人数で会話を楽しんだり、個別に自学自修したり、グループ討論したりする場を計画しています。

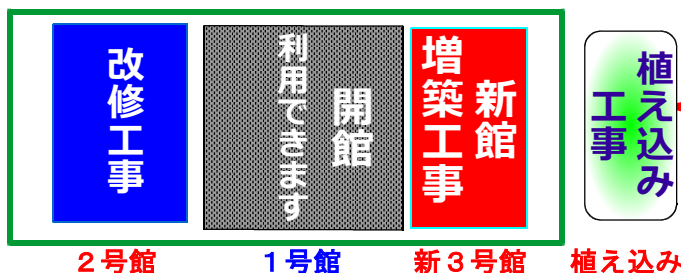
増築工事にあたり、騒音や振動、図書館の一時的な閉館などが生じ、利用者のみなさまにはご不便をおかけすることとなりますが、何卒ご理解とご協力をお願いいたします。

なお、工事の情報や臨時閉館など、詳細が決まり次第、随時お知らせします。

工事予定期間：新3号館-平成26年 6月～平成27年 5月

2号館-平成26年 6月～平成27年 2月

図書館配置図



(図書情報課長 肥土広康)

2013年度 図書館の活動

(平成26年2月14日現在)

1 学外会議関係

国立大学図書館会議

- 25. 6. 20 第60回国立大学図書館協会総会 (キャッスルプラザ)
- 25. 6. 21 第9回国立大学図書館協会マネジメント・セミナー参加 (キャッスルプラザ)

関東甲信越地区国立大学図書館協会

- 25. 4. 19 平成25年度関東甲信越地区国立大学図書館協会総会 (総合研究大学院大学)
- 25. 12. 3 第46回関東甲信越地区国立大学図書館協会事務(部・課)長会議 (筑波大学)

埼玉県大学・短期大学図書館協議会

- 25. 5. 30 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 (SALA) 幹事会 (女子栄養大学)
- 25. 6. 6 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 (SALA) 第26回総会 (女子栄養大学)
- 25. 6. 27 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 (SALA) 幹事会 (独協大学)
- 25. 10. 10 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 (SALA) 幹事会 (淑徳大学)
- 25. 11. 25 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 (SALA) 幹事会 (淑徳大学)
- 25. 12. 10 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 (SALA) 研修会 (淑徳大学)

埼玉県図書館協会

- 25. 5. 22 平成25年度埼玉県図書館協会理事会 (埼玉会館)
- 25. 6. 12 平成25年度埼玉県図書館協会総会 (埼玉会館)
- 25. 6. 14 平成25年度埼玉県図書館協力担当者会 (さいたま文学館)
- 25. 6. 19 図書館と県民のつどい埼玉2013実行委員会 (さいたま文学館)
- 25. 11. 1 図書館と県民のつどい埼玉2013実行委員会 (さいたま文学館)
- 26. 3. 12 平成25年度埼玉県図書館協会常任理事会 (埼玉会館)

2 学内会議関係

図書館会議

- 25. 7. 11 埼玉大学図書館会議 (平成25年度第1回)
- 25. 10. 21 埼玉大学図書館会議 (平成25年度第2回)
- 26. 1. 27 埼玉大学図書館会議 (平成25年度第3回)

館員連絡会

- 25. 4. 18 図書館員連絡会 (平成25年度第1回)
- 25. 5. 10 図書館員連絡会 (平成25年度第2回)
- 25. 5. 30 図書館員連絡会 (平成25年度第3回)
- 25. 6. 28 図書館員連絡会 (平成25年度第4回)
- 25. 7. 9 図書館員連絡会 (平成25年度第5回)
- 25. 8. 27 図書館員連絡会 (平成25年度第6回)
- 25. 9. 13 図書館員連絡会 (平成25年度第7回)
- 25. 10. 2 図書館員連絡会 (平成25年度第8回)
- 25. 10. 18 図書館員連絡会 (平成25年度第9回)
- 25. 11. 7 図書館員連絡会 (平成25年度第10回)
- 25. 11. 20 図書館員連絡会 (平成25年度第11回)
- 25. 12. 5 図書館員連絡会 (平成25年度第12回)
- 25. 12. 18 図書館員連絡会 (平成25年度第13回)
- 26. 1. 17 図書館員連絡会 (平成25年度第14回)
- 26. 1. 24 図書館員連絡会 (平成25年度第15回)
- 26. 2. 6 図書館員連絡会 (平成25年度第16回)
- 26. 2. 19 図書館員連絡会 (平成25年度第17回)

3 その他

研修・シンポジウム等関係

- 25. 5. 30～31 平成25年度第1回目録システム講習会(雑誌コース)受講(国立情報学研究所)
- 25. 6. 4 アカデミック・リンク・セミナー参加(千葉大学図書館)
- 25. 6. 6～7 オープンアクセス・サミット2013参加(国立情報学研究所)
- 25. 10. 22 Open Library Weeks 2013城西大学企画参加(城西大学水田記念図書館)
- 25. 10. 28 図書館総合展でのDRF10参加(パシフィコ横浜)
- 25. 11. 5 Open Library Weeks 2013跡見学園女子大学企画参加(跡見学園女子大学新座図書館)
- 25. 11. 5～8 平成25年度大学図書館職員短期研修会受講(東京大学附属図書館)
- 25. 11. 12 Open Library Weeks 2013文教大学企画参加(文教大学越谷図書館)
- 25. 11. 18 日本体育図書館協議会研修会参加(日本体育大学図書館)

図書館事業等

- 25. 5. 10、17 教養学部アカデミックスキルズ図書館ガイダンス実施
- 25. 5. 13～17 平成25年度新入生向け図書館オリエンテーション実施
- 25. 12. 1 図書館と県民のつどい埼玉2013(桶川市民ホール・さいたま文学館)
- 26. 3. 11 SciFinder 利用講習会(開催予定)

(企画調整担当 横塚光春)

既刊「武蔵野」一覧

埼玉大学図書館報「武蔵野」は、図書館の動向や皆様のご意見などを紹介する小冊子です。「むさしの」の後継誌として、2009年6月から刊行しています。図書館HPからアクセスしてご覧ください。

1号(2009.6刊)

- ・「武蔵野」創刊(図書館長 坂西友秀)
- ・図書館ニュースの発刊によせて(総合情報基盤機構長 川橋正昭)
- ・旧制浦高記念展示室の完成を願って(旧制浦高同窓会常務理事 上田治三郎)
- ・館員通信(利用サービス係長 小野寺伸)

2号(2009.8刊)

- ・SUCRAについて(専門員 村田 輝)
- ・SUCRA(機関リポジトリ)で利用の多い文献トップ30

3号(2009.10刊)

- ・大学図書館に望むこと(埼玉県立白岡高等学校・教諭 若海由美)
- ・こんな図書サービスがあればいいな～(文化科学研究科博士課程 李芝善)
- ・けやきの窓(理工学研究科長 水谷忠良)
- ・館員通信(元利用サービス係 白本清香)

4号(2010.2刊)

- ・歴史史料デジタル化の現状：過去の記録は誰のものか(教育学部准教授:鈴木道也)
- ・けやきの窓:私の推薦図書(経済学部長 伊藤修)
- ・「図書館と県民のつどい埼玉2009」:「デカンショ」と「フェアブル」(利用サービス係長 小野寺伸)
- ・「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告(SALA広報担当 湊伸子)
- ・ホームページがリニューアルされます！(工学部4年 渡邊雄)

5号(2010.4刊)

<フレッシュマン特集号>

- ・図書館紹介(図書館長 坂西友秀)
- ・図書館オリエンテーション
- ・図書館発見
 - 「留学生・留学希望者にうれしいニュース」
 - 「グループ学習室新設」
 - 「官立浦和高等学校記念資料室」
- ・「デカンショ」によせて(埼玉大学教養学部准教授・哲学 高橋克也)
- ・子どもと図書・文化

-
- 「埼玉県立図書館の児童サービスについて(埼玉県立久喜図書館 山元明美)」
「そよかぜを知っていますか(そよかぜ保育室 橋本慶子)」
・けやきの窓(教養学部長／教授 高木英至)

6号(2010.7刊)

<埼玉大学エコ特集>

- ・AGRICULTURE (図書館長 坂西友秀)
- ・埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪(経済科学研究科博士前期課程 堀合知子)
- ・有機農業に興味を持たれた方へ(経済科学研究科博士前期過程 堀合知子)
- ・有機農業に出会って(経済科学研究科1年 山本仁)
- ・お薦めの本(経済科学研究科1年 山本仁)
- ・埼玉大学有機農業研究会の展望(経済科学研究科 有坂昌平)
- ・本の紹介(経済科学研究科 有坂昌平)
- ・日本大学文理学部図書館研修(図書資料係 早川雅代)
- ・けやきの窓(教育学部長／教授 山口和孝)
- ・全国国立大学図書館協会総会報告(図書館長 坂西友秀)

7号(2010.11刊)

<特集 教育・研究と書籍>

- ・はじめに(図書館長 坂西友秀)
- ・過疎という問題に何処よりも早く直面した早川南小学校について(山梨県早川南小学校 校長 村松秀樹)
- ・絵本を用いた活動が自閉症児に与える効果について(教育学部教育心理カウンセリング 専修4年 成瀬 西)
- ・「アナログ本」の存在感(森野うさぎ)
- ・私たちは電子書籍と電子教科書にどう向き合うべきか(教育学研究科学校臨床心理専 修 孕石敏貴)
- ・けやきの窓(英語教育開発センター長／教授 外山昇)
- ・埼玉大学の教育・研究と埼玉大学生生活協同組合(埼玉大学生生活協同組合理事長／経 済学部 岡部恒治)
- ・既刊「武蔵野」一覧

8号(2011.4刊)

<図書館の1年>

- ・東日本大震災からの復興を願う: 原発事故」が突きつけたもの(図書館長 坂西友秀)
- ・知の世界への眩しさ(日本青年館公益事業部長・業務部長 佛木完)
- ・大学の猫たち(理工学研究科教授 小松登志子)
- ・けやきの窓(脳科学融合研究センター長／教授 中井淳一)

-
- ・埼玉大学図書館の活動(平成22年4月～平成23年3月)
 - ・既刊「武蔵野」一覧

9号(2011.7刊)

<未来を創る - 大学から>

- ・大学での学びを未来の創造に(図書館長 坂西友秀)
- ・もしも大学時代に戻れたら(埼玉県立浦和図書館長 小川晴夫)
- ・大学生生活折り返し地点に立って(理学部 山尾朋未)
- ・平成23年度新入生向け図書館オリエンテーション(情報サービスチーム 岩崎真美/
成田義樹)
- ・けやきの窓(国際交流センター長/経済学部教授 安藤陽)
- ・埼玉大学在職30年間を振り返って(人間文化研究機構国立歴史民俗博物館管理部研
究協力課図書係長 小野寺伸)
- ・お知らせ-図書館の節電対策について(図書情報課管理チーム 須永博夫)
- ・2011年度図書館会議委員
- ・既刊「武蔵野」一覧

10号(2011.11刊)

- ・「グローバル化」の中の社会と文化(図書館長 坂西友秀)
- ・週に一度は「参考図書コーナー」タイムを(教養学部准教授 野中進)
- ・北欧を旅してみても～ありのままを大切に生きる国～(福祉施設職員 石田かおり)
- ・ニューヨーク大学の図書館の紹介(ニューヨーク大学客員研究員/教育学部准教授
清水由紀)
- ・けやきの窓(教育学部教授 薄井俊二)
- ・ニューヨークの街角から(ニューヨーク大学客員研究員/教育学部准教授 清水由紀)
- ・既刊「武蔵野」一覧

11号(2012.3刊)

<3.11から1年 一年を振り返り、今を考える>

- ・3.11から1年 一年を振り返り、今を考える(図書館長 坂西友秀)
 - ・震災を経て(宮城県山元町・元日本青年団協議会副会長 齋藤緑)
 - ・図書館をより過ごしやすい環境に -「水分補給」に関するご意見募集- (情報サービス
チーム 成田義樹)
 - ・考古学研究会の歩み(考古学研究会 野村友里)
 - ・機関リポジトリSUCRA説明会(情報サービスチーム 岩崎真美)
 - ・けやきの窓(理工学研究科教授 重原孝臣)
 - ・見沼で輝く埼玉大生の個性(教養学部・教養学科3年 鎌田諒)
 - ・見沼たんぼと紙芝居 意外と奥が深い日本特有の文化(経済学部社会環境設計学科4
年 澤田茉那美)
-

-
- ・紙芝居『見沼の笛』
 - ・2011年度 図書館活動（図書情報課管理チーム 須永博夫）
 - ・既刊「武蔵野」一覧

12号(2012.7刊)

<「日本文化」再考>

- ・はじめに一文化の「衣」―（図書館長 坂西友秀）
- ・Does One Size Really Fit All?（英語教育開発センター / Lecturer Richard Sheehan）
- ・Overcoming Social Inertia in Japan（英語教育開発センター / Assistant Professor Leander S. Hughes）
- ・平成24年度図書館オリエンテーション（情報サービスチーム 岩崎真美）
- ・けやきの窓（教育機構教育企画室・准教授 細井優子）
- ・目録のお仕事（図書情報課管理チーム 安達芳）
- ・図書館会議の開催（図書館長 坂西友秀）
- ・2012年度図書館会議委員（図書情報課管理チーム 須永博夫）
- ・全国国立大学図書館協会総会報告（図書館長 坂西友秀）

13号(2013.2刊)

<図書館と私>

- ・図書館を「主体的な学び」の場に（図書館長 坂西友秀）
- ・図書館の思い出（テレビ埼玉総務経理部 関口聡美）
- ・古書の街神保町にて（図書資料係 岩崎真美）
- ・けやきの窓（教育学研究科臨床心理コース 院生・教員 内田浩子）
- ・児童書とステレオタイプ・偏見（教育学部 坂西友秀）
- ・第2回・第3回図書館会議報告
- ・図書館からのお知らせとお願い―①新入館システム, ②図書返却のお願い

14号(2013.5刊)

<未来を拓く力をねがって>

- ・ようこそ埼玉大学へ（図書館長 坂西友秀）
 - ・新入生オリエンテーションについて（情報サービス担当係 早川雅代）
 - ・新一年生のみなさんへ（理学部生体制御学科 准教授 塚原伸治）
 - ・内発的な出遭いの場としての図書館（教養学部教養学科 教授 加地大介）
 - ・「いなかもの」とロール・モデル（経済学部経済学科 教授 禹宗杭）
 - ・関東甲信越・国立大学図書館協会総会（図書館長 坂西友秀）
 - ・本の街、神田・神保町で映画を楽しむ（教育学部 教授 細淵富夫）
 - ・子どもと楽しむ絵本（けやきの窓）（情報サービス担当係 滝澤千夏）
 - ・図書館増築のご案内とその展望（図書館長 坂西友秀）
 - ・2013年度全学図書館会議委員
-

-
- ・図書館からのお知らせとお願い
 - ・2012(H24)年度埼玉大学図書館の活動

15号(2014.2刊)

<日本の今、世界の今>

- ・現在・過去・未来 (坂西友秀)
- ・心でつなぐ平和の想い (押井那歩)
- ・Saitama University Students Presented Short Papers in English at Gakushuin University to an International English Audience (Stacey Vye)
- ・いまどきの定時制高校 (戸賀沢亮子)
- ・定時制高校の教師人生 (高野大樹)
- ・2013年度図書館と県民のつどい～河川の国～荒川を中心に～ (柴原秀美・山岸路子)
- ・「肥後の猛婦」の独り言 (城川由美)
- ・「第3回図書館会議」の開催
- ・北欧スウェーデンの暮らし (けやきの窓) (北田 礼)
- ・図書館増築と改修工事のお知らせとお願い (肥土広康)
- ・2013年度埼玉大学図書館の活動 (横塚光春)
- ・既刊—武蔵野一覧

